

覆水は盆に返らず

あ つじ てつ し
阿辻 哲次 京都大学教授

京都は「盆地」であるというが、この「盆」を私は大学生のころまでずっと、お茶などを載せて運ぶあの「ぼん」のことだと思っていた。しかし平らな面にモノを載せる「ぼん」ではどう考えても「盆地」の形にならないし、ことわざにある「覆水」だって、そこに返せるはずがない。この「盆」が底の浅い鉢のことだと知ったのは、中国語の授業で「臉盆」(洗面器)という単語を習った時であった。

周の建国の功臣とされる太公望呂尚は、老年にいたるまでうだつのあがらない人物だったが、やがて周の文王に見いだされて頭角を現した。

若いころの呂尚は本ばかり読んでまったく仕事をせず、あまりの貧しさに妻が離縁を申し出た。しかしのちに呂尚が出世して斉の国王となると、もとの妻が臆面もなく現れて出てきて復縁を願い出た。その時呂尚は鉢に入れた水を地面に撒き、そしてかつての妻に告げた。

「おまえは私のもとを去ったのに、今こうして復縁をせまる。でも一度こぼれた水は、二度ともとの容器には戻らないものなのだ。」

「覆水は盆に返らず」は、一度離婚した夫婦は元通りにならないたどえであったが、のちに「一度犯した過ちや誤りは元通りにはならない」たとえとしても用いられるようになった。また出典として、漢の朱買臣にある類似の説話が採られることもある。